



NEWSLETTER

*Asian Research
Institute of Underwater Archaeology*

アジア水中考古学研究所会報
(旧九州・沖縄水中考古学協会会報)
通巻1号 2008年6月30日発行

No. 1

June 2008





CONTENTS

地球温暖化と水没遺跡

Terrestrial Warming and Submerged Sites

石原 渉 Wataru Ishihara 1

鷹島町第 11 次潜水調査 (神崎地区)2001 年度

Eleventh Season of Underwater Survey at Kozaki, Takashima-town:2001

林田 憲三 Kenzo Hayashida 2

【書評】

Beneath the Seas Adventures with Institute of Nautical Archeology

ランドール佐々木 Randall J.Sasaki 7

NEWS & NOTE

アジア水中考古学研究所の設立祝賀会開催される。..... 10

新安沈没船発掘 30 周年記念国際シンポジウム開催される。..... 10

活動報告 (2005 年 8 月～2007 年 3 月) 13

平成 18 年度特定非営利活動に係る事業会計収支計算書 14

平成 18 年度その他の事業会計収支計算書 14

2005-2006 年度受領図書 15

地球温暖化と水没遺跡

南太平洋の島々が水没の危機にあると言う。地球温暖化の影響で、南極や北極の永久凍土が氷解し、海水面が上昇しているからだ。南の島々でなくとも、世界各地の沿岸部では高潮による被害が始めている。

長崎県は離島を多く抱えているが、その島嶼部には、潮間帯遺跡の存在が知られている。大潮などの干潮時には地上に露出し、満潮時には海没するという遺跡だ。縄文時代の遺跡に多くみられる。調査時は潮見表を睨みながら、短時間に掘り上げて遺構と遺物を記録に納める苦労があるという。長崎県の鷹島では水深 25m の地点から縄文時代早期の押型紋土器の包含層が確認された。縄文時代の海退期に営まれた遺跡だったのであろう。元東大海洋研究所教授の那須紀幸さんは、現在、水深 30m 付近の海底には先史時代の遺跡が数多く存在している可能性が高いと語っている。世界各地では、勢力的に海浜付近の海底を調査し、海底遺跡を発見しているようだ。さて、地球温暖化がこのままのペースで進めば、現在、海浜部にある遺跡さえも水没の憂き目に遭うだろう。現に地中海諸国の中にも、そのような例が見え始めた。

人類は氷河期を生き抜いて今日の繁栄を築き上げた。それは英知の賜物であろう。今回の地球規模の温暖化も、その英知を結集すれば乗り切れぬ筈はない。それとともに人類の足跡が海底下にもあるのであれば、それを調べる手だても腐心しなくてはならない。

会費納入のお願い

個人会員：4000 円 団体会員：1 口 10,000 円
(郵便振替口座) 特定非営利活動法人アジア水中考古学研究所
01730-5-16161

front：韓国・国立海洋遺物展示館 (野上建紀撮影)

back：インドネシア・ムナ島ラハ港 (野上建紀撮影)

鷹島町第 11 次潜水調査
(神崎地区) : 2001 年度

林田 憲三

1. はじめに (Pl.1、Fig.1)

この調査は九州・沖縄水中考古学協会が鷹島海底遺跡で平成 13 年 (2001) 8 月 1 日 (水曜日) から 8 月 10 日 (金曜日) にかけて行ったものである。調査参加者は石原渉、高野晋司、加藤隆也、小川光彦、横田浩、山本祐司、本田浩二郎、石川満万、杉崎彩子、木村淳、中村俊介、小野田康久、石本清、三浦清文、松尾昭子、林田憲三である。協会は鷹島海底遺跡で目視による潜水調査を平成 4 年 (1992) ~ 平成 11 年 (1999) 迄行い、平成 12 年度 (2000) からは海底に調査区を設定して、遺跡の内容確認のための小規模な発掘調査を行っている。今回の報告は鷹島町第 11 次潜水調査 (1) (神崎地区) の調査成果である。発掘調査は平成 12 年度に行なった神崎港改修工事に伴う緊急調査区域に接し、その位置は僅かに北側に隔たった地点である。神崎地区の発掘調査は平成 6 年 (1994) に初めて行われ、平成 7 年 (1995) さらに平成 12 年 (2000) からは毎年行なわれている。

平成 6 年 (1994) の緊急発掘調査では、2 個の礎石が対になった木製礎が現海底面より 1m 下がったシルト層中で検出され、元軍船の礎の構造が明らかとなった。平成 12 年度 ~ 14 年度 (2000 ~ 2002) の緊急発掘調査では元軍船の部材が数多く出土している。特に平成 13 年度の調査では元軍船のマストを支える台座や遺存状態の良好な外板などが出土している。さらに刀、矢 (箭) 束、弩、「てつはう」などの武器類も多く出土している。他にも銅銭、銅匙、鹿角の柄、青銅製帯金具、朱色の漆を施した皮鎧の小札などがある。また、大量の中国陶磁器には鈞窯の少なくとも 2 個体以上の鉢が出土している。鈞窯の製品は鷹島海底遺跡で初めての出土例である。人の頭部片も出土している。元軍船の部材とその積載品では、1974 年にこの港でパスパ文字の印面をもった「管軍総把印」が採集されていることを考慮すると、出土した遺物の豊富さの意義は大きいといえるであろう。

2. 調査地点 (Pl.2、Fig.2)



Pl.1 松浦市鷹島町の全景



Fig.1 調査区の位置図

調査地点は平成 6 年 (1994) と平成 7 年 (1995) に行われた緊急発掘調査地点の東側にあたり、平成 12 年度の緊急発掘調査地点の北側に接した地点である。平成 9 年 (1997) に協会の行った目視による潜水調査の調査区域内でもある。発掘調査地点は 1979 ~ 1981 年に行われた文部省科学研究による神崎地区の潜水調査でも元寇関係の遺物が確認されているために、当初から多くの遺物が発見されるものと考えられた。

調査地点周辺の地形は、港を挟んで両側に丘陵部が海に突き出ている。調査地点はその東側丘陵部の先端部に位置している。海底は潮間帯付近では小さな礫に覆われていて、-5m の標高付近の海底では大きな礫群がみられる。この付近から急激に海底の傾斜はその角度を増している。調査地点の標高は -8.6m から -10.25m で、底質はシルトとなっている。昨年の調



PI.2 調査地点の全景



PI.4 海底の発掘風景



PI.3 開発前の神崎港 (石原 渉 提供)



PI.5 矢束検出状況

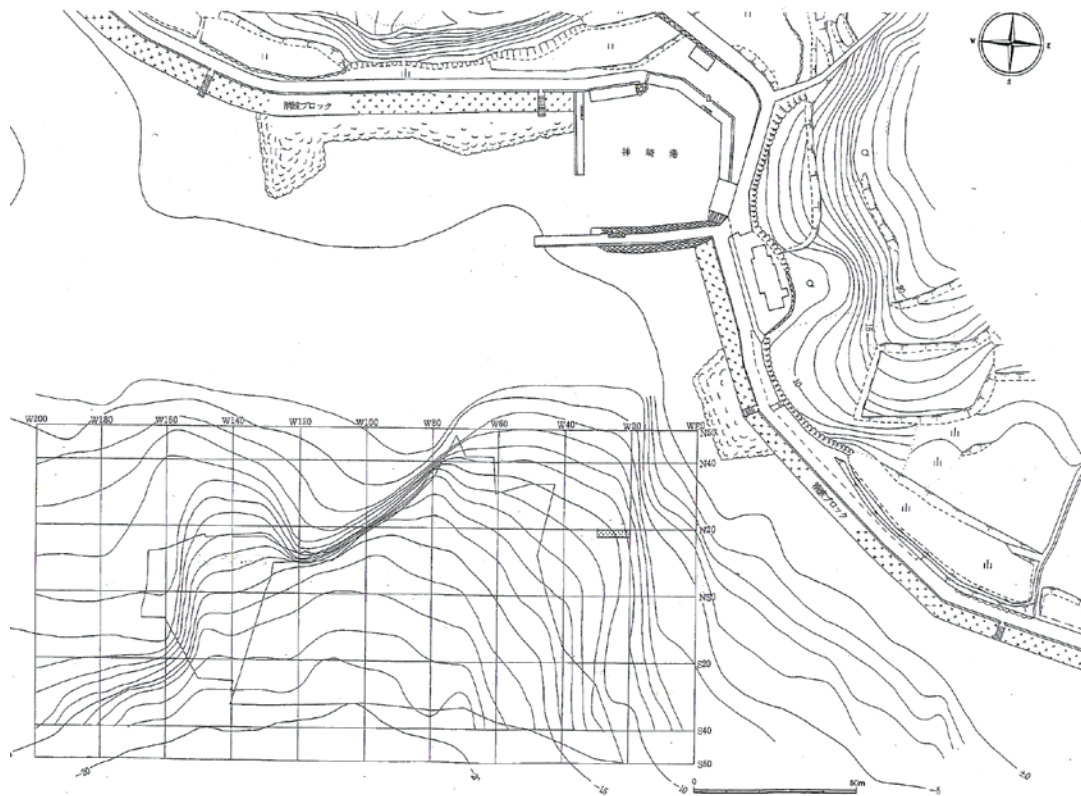


Fig.2 第11次潜水調査の地区図面

査では幅 2m、長さ 10m の東西に延びるトレンチを設定し、第 4 層の貝殻を多量に含む灰色粗砂層の上面で褐釉壺の胴部片 1 点と約半分が欠損した磚を 1 点確認している。

3. 調査の概要 (Pls.3・4、Fig.3)

調査地点は大型木製碇が出土した地点から真北の方向の陸地に近い約 80m 離れた地点である。そこは W140、N30-N40 地点の水深が 7.5m ~ 9.5m の海底で、平成 11 年 (2000) の緊急発掘調査地点の北側に今回の調査地点を設定した。設定した発掘トレンチは基準点のある陸上から南側と西側の海底へ延ばした W20 と W30 ラインと N20 と N22 ラインが交差する 4 地点で囲まれる区域である。発掘対象面積は幅 2m、長さが 10m の 20㎡である。

調査区は西側基点 W30 から東側基点 W20 までの 2m×10m のトレンチを 2m×2m の 5 つの小グリッドに分け、それぞれのグリッドを A、B、C、D、E とした。ドレッジを用いての発掘では、まず第 1 層のシルト層の除去を行なった。この層はトレンチの東側、グリッド D の一部とグリッド E が含まれる W20 ~ W22.5 地点では厚さ約 25cm である。この地点では第 2 層の砂層が堆積しておらず、第 3 層である大きな貝殻を大量に含む灰色粗砂層が第 1 層下に堆積している。この地点の 3 層は浅く堆積しており、3 層下には基盤の礫層が確認される。第 1 層はトレンチの W30 地点で最も厚く堆積していて、約 40cm ある。第 2 層は小さな貝殻を含む砂層で、W22.5 から W30 までは東側から西側へと徐々に堆積の厚みが増す。グリッド A の最深部では 50cm 以上と堆積している。ドレッジの稼動中は堆積しているシルトや砂が舞い上がり透視度が急激に悪化するが、元寇関係遺物が出土する鍵となる層が大形の貝殻を大量に含む灰色粗砂層であるため、視界が極端に低下しても間違いなくこの層の上面でドレッジの吸引口を安定させることができた。3 層上面で検出した 8 点の遺物の検出状況はカメラによる撮影を行い、遺物の位置、レベルなどの計測を行った後に回収した。3 層上面で検出した遺物の中には約 1/2 が残存した近世の素焼きの蛸壺が 1 点あり、元寇

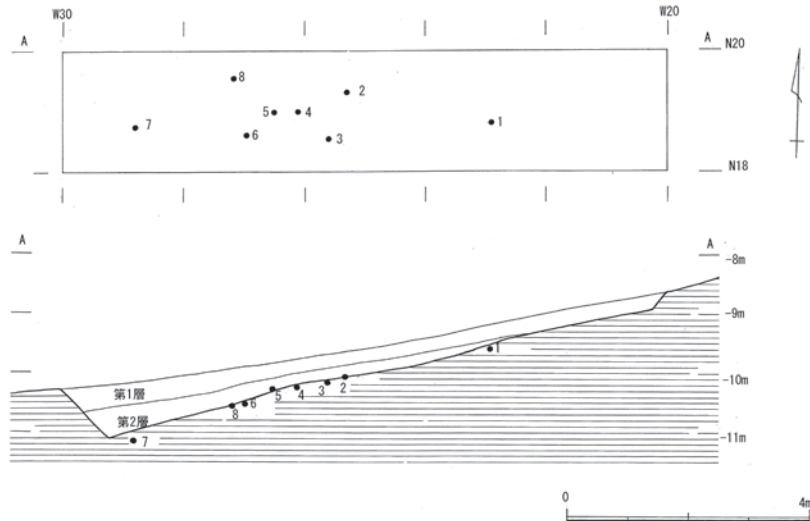


Fig.3 遺物出土位置および北壁土層断面図 (1/80)

関係遺物との混在がこの層のなかで認められた。調査地点が海岸部に近い海底であるため、遺物が波や潮流の影響を受けやすくなると考えられる。

4. 遺物の出土状況 (Fig.3、Pl.5)

3 層上面で検出した遺物 8 点のうち元寇関係遺物が 7 点、近世に比定できる蛸壺の破片が 1 点ある。また 6 点がグリッド B および C で検出し、他の 2 点はそれぞれグリッド A と D で検出している。遺物にはそれぞれ No.1 から No.8 までの番号を付けた。No.1 は褐釉壺の胴部破片で、グリッド D のほぼ中央の標高 -9.5m で出土していた。No.2 は褐釉壺の胴部片でグリッド C の中央よりやや西側の標高 -10m を僅かに下がった地点で検出された。No.3 は近世の蛸壺と思われるもので、グリッド C の標高 -10m より 15cm 程下がった地点で出土した。口縁部から底部までの全体の約 1/2 が残存している。No.4 は褐釉部壺の胴部片で、グリッド B と C が接した中央付近で、内面を上にして検出された。標高は約 10.25m を測る。No.5 は外面には蓮弁文が認められる龍泉窯系青磁碗の口縁部破片である。グリッド B の中央から東側へ寄った標高 -10.25m より僅かに下がった地点で検出された。No.6 は褐釉壺の口縁部片である。グリッド B の中央からやや南側に寄った標高 -10.50m で検出された。No.7 は褐釉四耳壺で、胴部上位が全体の約 1/4 が欠損するが、おおむね完形品といえる。グリッド A のほぼ中央部近くの標高 -11m より僅かに下がった地点で出土している。No.8 は矢(箭)東である。



Pl.6 引き揚げられた矢束



Pl.8 褐釉の四耳壺



Pl.9 近世の蛸壺



Pl.7 海底から出土した陶磁器片

グリッド B の中央から北側に寄った標高 -10.50m より極僅かに下がった地点で出土した。

5. 出土遺物 (Pls.6-9)

No.1(Pl.7) は陶器の壺で胴部中位の破片である。外面には暗褐色の釉が施されている、内面は灰黒色で釉はない。No.2(Pl.7) は褐釉壺の胴部細片である。胎土は明褐色を呈し表面の釉は剥離している。

No.3(Pl.9) は近世の蛸壺である。外面の頸部から胴部にかけて轆轤による右上がりの強い指なでの凹凸が見られる。内面には凹凸は見られない。底部には穿孔が僅かに残存している。復元口径は 11.4cm、器高は 25.7cm を測る。この蛸壺片のように 3 層上面で元寇関係遺物と時代の異なる遺物が共伴することがある。これまで神崎港で行われた海底調査で時期が新しい遺物がより古いものの中から出土した例があり、海岸部に近い海底の堆積層中で認められる。これは波や潮の動きの影響を受けやすい海岸に近い海底で見られることから、底質がシルト層や砂層の場合、海底の表面にあった遺物が時間の経過と共に徐々に海底下に埋

没するものと考えられる。この蛸壺片はその一例で、硬い堆積層である大形の貝殻が大量に混じる砂層の上面で出土している。

No.4(Pl.7)、陶器の胴部片、外面は黒褐色の釉が施されている。内面には釉は認められない。

No.5(Pl.7)、これは龍泉窯系青磁碗の口縁部破片である。外面には蓮弁文が認められる。表面は摩滅が著しい。表面に施されている釉は淡灰緑色を呈している。

No.6(Pl.7)、この陶器は口縁部から胴部上位にかけての破片で、表面に施されている釉は暗褐色を呈する。肩部には耳の痕跡はない。

No.7(Pl.8)、これは陶器で褐釉四耳壺である。胴部は約 1/4 が欠損しているが、残存状態は良好である。胎土は灰色を呈し、外面の釉は殆ど剥離している。肩部には耳が 4 箇所に貼り付けられ、2 個づつが接近して配置されている。外面胴部下位には左上がりの削り痕がある。外底には重ね焼きの目痕がある。口径は 6.8cm、器高は 23.6cm を測る。

No.8(Pls.5・6)、矢(箭)束である。矢束全体に褐色の錆びが覆っている。束の断面はかまぼこ状で、矢の上面は弧状となり、下面は比較的平らな面となる。残長は約 32cm、厚みは 13.6cm、幅約 19cm、重さは 4540g を測る。矢柄は木質で、約 70 本が残存している。1 本の矢の径は 8～9mm を測る。福岡市埋蔵文化財センターの協力を得て、矢束のレントゲン撮影をした。レントゲンの映像からは矢の先端の鉄鏃は腐食が激しく、鉄鏃らしきものが漠然と認められるものの、その形状は明瞭でない。

6. まとめ

神崎港の調査は幅 2m×長さ 10m のトレンチ調査であった。日程と面積からして多くの成果を求めるこ

とは困難であろう。しかし3層上面で8点の遺物を検出し、そのうち1点は元寇関係遺物ではなかったが、他の7点は青磁が1点、陶器が5点、武器が1点であった。特にこの調査で出土した矢束は2001年の緊急発掘調査で出土例があるものの、70本程の矢が束となって、錆びて固まった状態で出土したのはこの調査が2例目である。その後エックス線撮影をおこなったが、矢の先端部の鉄鏃はその形の映像が明瞭に認められず、錆びが著しく進行している。表面を覆った錆びがさらに内部の鉄に大きく影響を与え、殆ど鉄が消失していることが判明した。

2000年に神崎港地区で行ったトレンチの発掘調査に続いて、神崎港海底の堆積層の層序が把握できたことは神崎港地区でのこれからの調査に有効且つ貴重な資料を与えた。堆積層で注目すべき層は第3層である。この層が元寇関係遺物を包含する層である。この層の特徴は灰色粗砂層で大形の貝殻を多量に含んでいることである。そのためこの層は比較的締まりのある硬い砂層である。この砂層の上面か上面よりやや下がった地点で元寇関係遺物が出土することが神崎港地区のこれまでの調査で確認されている。

神崎港地区には平成6年(1994)の緊急発掘調査で出土した大型の碇とそれに伴う二石分離型の碇石、昭和49年(1974)に神崎港海岸で採集された管軍総把印がある。この青銅印は南宋軍の1000人の兵卒を指揮下に置く隊長クラスが所有したものである。総把印がどのような部隊を率いたのか神崎港のこれまでの調査で出土した遺物を詳細に調べると何らかの手がかりがつかめると思われる。元軍の部隊には水夫を含む戦闘部隊(騎馬隊、砲手隊、弓矢隊など)、飲料水を含む食料調達部隊、上陸後屯営を行なう部隊なども総把印に委任されるであろう。神崎港地区の海底出土の遺物がこれらの部隊と何らかの関係を結び得るものがあるか、どのように関連付けが可能なのか考えてみる必要がある。神崎港で最も多く出土する遺物は容器としての機能をもつ褐釉陶器壺がある。これらの容器の容積は大きくなく、固形物や液体のどちらの用途にも使える容器である。磁器である白磁碗や青磁碗、天目碗、鈎窯鉢などは陶器類に比べれば、それらの出土量は少ない。特に後者の二種類は現在まで数点しか出土しておらず、極端に少ない。更に高麗青磁など朝鮮半島系は東路軍に所属すると考えられる遺物であるが、これ

も極端に少ない。容器で容積の大きい大型の甕などは神崎港の調査では少ない。平成12年、13年(2000、2001)の緊急調査でもこのような器種は出土していない。帯金具や湖洲鏡などの服飾と関連する遺物等の出土例もある。武器である太刀、槍、弓、矢、てつはう等の遺物は平成13年(2001)の緊急発掘調査でまとも出土している。平成6年に元位置で出土した大型の碇を含む3基の碇の近くでは竹索などのロープが出土している。碇頭を南側(沖側)に向けて海底にあることと、ロープの方向が南北へ延びている出土状況を考えると、この碇の位置よりさらに北側、すなわち陸地側に近い場所に船が停泊していたこととなる。海底の碇と船の距離は船の全長の約3倍が船を安定させ、一定の場所に係留が可能であると言われている。3基の碇頭がすべて南側に向くということは停泊している船が風により碇と反対側、つまり風下に強く押し流され碇とロープには負荷が掛かり、ロープが切断し、その結果船が海岸に打ち上げられたり、座礁したり、あるいは船同士が衝突して破壊されたりすることが容易に想定できる。

神崎港海底の碇が出土した付近には当然複数の沈没した船が存在することが想定できる。神崎港海底調査で出土した遺物が沈没したこれらの船に積まれていたものであることは当然考えられる。そして江南軍の船団が神崎に停泊しているなかに東路軍の船や兵士が僅かであるが、含まれていた可能性を示唆する遺物もある。江南軍の船団の連絡などに東路軍の船が使用されたとも考えられる。また管軍総把印の役職を持つ隊長は恐らく江南軍の戦闘部隊を率いていた人物ではないかと考えたい。

注(1)、九州・沖縄水中考古学協会による鷹島海底遺跡の潜水調査は鷹島町からの委託事業として1992年から行い、調査は遺跡内の船唐津地区で1回、神崎地区で10回2001年までにこなっている。

会員募集のお知らせ

特定非営利活動法人アジア水中考古学研究所は会員を募集しております。入会ご希望の方は下記までご連絡ください。

〒812-0041

福岡市博多区吉塚6丁目10番12-308号
アジア水中考古学研究所
kosuwa@h6.dion.ne.jp

《書評》

Beneath the Seven Seas Adventures with the Institute of Nautical Archaeology

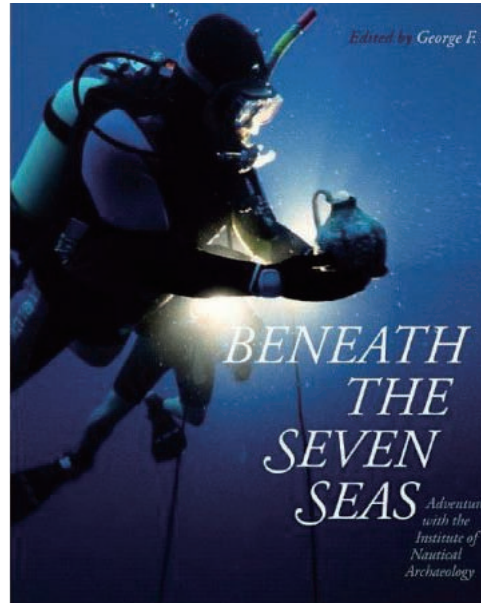
Edt. George Bass 2005 Thames & Hudson

Photo 433 410 Pages.

ランドール佐々木

1960年、当時アメリカ・ペンシルバニア大学で大学院生だったジョージ・バス先生が地上での発掘方法をそのまま水中に持ち込み、考古学者が自ら水中で調査を行ったのが水中考古学の始まりであると言われていた。この時、トルコの Cape Gelidonya で調査が行われた。この沈没船は青銅器時代(1200BC頃)の船であることが調査の結果分かった。それまで考えられていたギリシャ人を中心とする交易が実はフェニキア人(現在のイスラエルやレバノンに住んでいた人々)の手によって行われていたのではないかと新たな説を唱えるきっかけとなった。後に Uluburun 沈没船(1300BC)の発見により、その説は確かなものとなった。これはほんの一例に過ぎないが、水中考古学、または沈没船考古学の学史、そして、水中考古学が歴史・考古学に与えた影響は地中海に限らず大きい。しかし、日本国内ではこの学問に対しての学者の認知度が高いとは言えないのが現状であり、まして一般大衆でこの学問を理解している人はアジア、アフリカ、ヨーロッパ諸外国に比べ少ないのは否めない事実である。それはなぜであろうか? 思うに手軽に読める水中考古学関連の文献が日本では入手困難であるからではないだろうか?

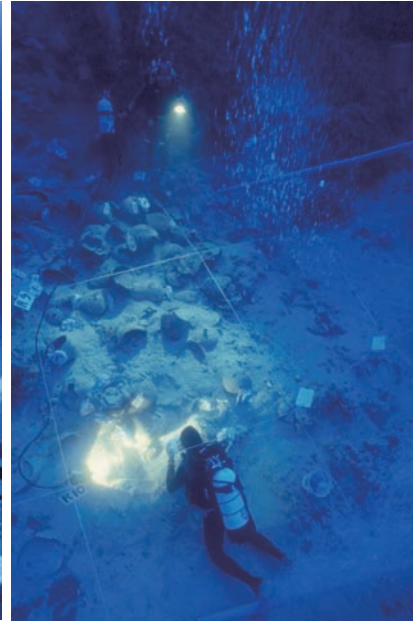
沈没船の考古学はいつ、どのようにして始まったのであろうか? いままでどのような研究が行われ、そして、これからどのような研究がおこなわれるのであろうか? 実際の発掘作業とはどんなものか、遺物から何が学べるのか、沈没船の歴史・考古学的価値とは? そのような疑問に答えてくれる本が最近出版された。バス先生が編集した「Beneath the Seven Seas Adventures with the Institute of Nautical Archaeology(Thames & Hudson社)」がその本である。まだ翻訳されてはいないが、一般向けに書かれた本であり、この学問への挑戦心と好奇心、そして多少



の英語の教養があれば読みきれ得であろう。この本の趣旨をおおまかに紹介し、具体例を用いながらこの本がなぜ水中考古学を目指す者に必要なのか、そして、水中考古学に興味の無い人も読んでみる価値があるのか、長所・短所などを持論ではあるがこの場をかりて解説してみた。

水中考古学の学史を見ると、バス先生が沈没船の発掘のスタンダードを作り上げ、そして次の世代へと継承していったといえる。彼は Institute of Nautical Archaeology(INA) という調査団体を作り上げ、INA は現在でも沈没船発掘の世界的リーダー組織である。バス先生と INA の歴史を一般の人にも広く理解してもらおう、それがこの本の目的である。内容を見てみよう。世界各地で行われた沈没船の調査が紹介されている。時代別に並べてあり、地中海の青銅器時代から始まり、古代ギリシャ、ローマ、世界各地の中世、ルネッサンス、17世紀、18世紀、そして、近・現在の沈没船となる。計39遺跡が紹介され、どれも3~6ページほどに短くまとめている。最初から一日一隻の沈没船について読んでも良いであろうし、興味を惹かれる沈没船から読んでいってもかまわないであろう。それぞれの沈没船は発掘調査団長、もしくは担当者が書いており、難しい内容を省き、調査の様子などを特に詳しく物語っている。登場する人は皆、名前を紹介され、会話もたくさん盛り込まれている。そのため、まるで物語を読んでいるような気がするのである。沈没船の積荷、構造、歴史的重要性なども書かれているが、

物語の中に組み込まれた形で紹介されている。つまり、「Steffy さんはこう思った」と述べ、その後で彼の解釈となぜそのような解釈を行ったかを当時を振り返りながら書かれている。この本の一つの利点はオールカラーで写真が豊富であることである。写真を見るだけで発掘の様子分かるようにレイアウトにも工夫が凝らされている。また、値段も大きな本の割には格安である。今まで水中考古学関係の本は何十冊と買っているが今まで購入した本のなかでは最もお買い得な本である。



この本に最初に目を通して気がつ

いたのは、一般向けに書かれているため、専門家を納得させるには物足りないのではないかと思ったことである。船の構造などは簡単に書かれているため、ほとんど理解せずに読み飛ばしてしまうほどである。しかし、すべての沈没船について詳しく知っている人はそれほどいないであろう。そのため、専門家であっても読み応えのある部分があり、そして読む人は誰でも新しい発見をすると思う。さらには、巻末にある文献目録を参考にもっと詳しく沈没船について学ぶことができる。それぞれの沈没船について、少なくとも2～3件、時には10件以上の文献が載せてある。この本で大まかな内容を掴み、さらに詳しく研究を進めていくことが可能となる。

バス先生は本の最初で船の研究の重要性を説いている。「人類が農業を始める以前から船と人間社会は深く関わってきた。歴史を語る時、これを忘れてはならない。また、産業革命以前において船はその当時の技術の結晶であり、人類最大の“遺物”である。」このように書かれているが、一つ物足りなさを感じたのは水中考古学の大きな流れ、その目的をほのめかしているものの、きちんと解説をしていないため、調査方法とその結果だけが強調されているきらいがあることである。水中考古学調査の根底にはセオリーがあり、それを理解していないとこの本の意義を見失う可能性がある。特に、英語を得意としていない読者にはこの定義を読み取るのは難しい。そこで、本では紹介されていないが、バス先生が作り上げた水中考古学の調査の流れ、そして定義を簡単に紹介する。調査の流れは1. 調査目的の確認、2. サーヴェイ（遺跡の有無の確認・事前調査・非破壊調査）、3. 発掘、4. 遺物整理、5. 保存処理、6. 調査・研究（歴史的意義の確認）、7. 出版・報告である。保存処理などについては本文中で軽く触れられているが、遺物の保存に何十年も時間が費やされることもあることを念頭に入れておいて貰いたい。この学問を定義すると、人類と水（特に海）の関係を明らかにする考古学・歴史学の一分野であり、海が歴史・文化に与えたその影響力を解明していく。そして、その目的のためにサーヴェイ・発掘・保存処理などの技術開発をも含めた総合的な学問である。特に INA では Nautical Archaeology（船舶・海事考古学）を主な研究テーマとしており、船の歴史文化人類学を学ぶ。この定義を理解した上で読むことによってより一層この本の内容を掴むことが出来るであろう。



最後にこの本の最大の短所（これは INA の致命的な弱点でもあるが）は、紹介されている沈没船が西洋に偏っていることである。この本を読んで、“西洋”の水中考古学を知ることができてもアジアや他地域の船・海の歴史は見えてこない。新安沖沈没船やタイでの発掘については取り上げられ

ているが、世界には様々な研究機関があり、オーストラリア、韓国、中国、そしてインドなどでも精力的に研究を行っている。もちろん、日本の鷹島海底遺跡もここ数年で世界的に有名になった。この偏りはINAが直接関わったプロジェクトを対象として書かれた本であるため仕方がないことではある。そのため改めて、もっとINAが世界の考古学に目を向けるべきであることを痛感させられたのである。しかし、他の地域の

研究もまた一つの地域にこもっている印象を受けることがある。水中考古学はもっとグローバルな研究を進めるべきではなかろうか？INAの研究成果は高く評価されるべきであり、この本を通じて世界にもっと広く知ってもらいたい。これにより、世界がINAから学び、またINAも世界から学ぶ。日本も世界の流れに乗れるようここでNewsletterの読者にこの本を読む重要性を知ってもらえれば幸いである。

本書で取り上げられている遺跡

- | | | | |
|---------------------------|--------------------------|-----------------------|---------------------------|
| 1. Seytan Deresi | 10. Yassiada | 19. Yassiada | 28. The Plantation Vessel |
| 2. Uluburun | 11. Tantara Lagoon | 20. Zuiderse | 29. Privateer Defence |
| 3. Cape Gelidonya | 12. Bozburun | 21. Pepper Wreck | 30. The Betsy |
| 4. Pabuc Burnu | 13. Serce Limani | 22. Monte Cristi | 31. The Ten Sail |
| 5. Tektas Burnu | 14. Camalti Burnu | 23. La Belle | 32. Cleopatra's Barge |
| 6. Kyrenia | 15. Black Sea Shipwrecks | 24. Port Royal | 33. A Horse Powered Ferry |
| 7. La Secca di Capistello | 16. Shinan Shipwreck | 25. Mombasa Wreck | 34. Red River Wreck |
| 8. Serce Limani | 17. Almere | 26. Great Basses Reef | 35. The Denbigh |
| 9. Kinneret Boat | 18. Ko Si Chang | 27. Sadana Island | |



Lloyd's



Class NK

Lloyd's・NK他水中検査認定事業所

水中考古学関連調査支援 マリンレジュー指導/器材販売

國富株式会社

長崎営業所 〒852-8003 長崎市旭町2-10 TEL : 095-862-5037 FAX : 095-862-5038

上五島出張所 〒857-4411 南松浦郡新上五島町相河崎1052-15 TEL : 0959-52-2684

本社 呉海洋基地 / 営業所 東京、大阪、呉、広島、小倉、福岡、神戸

E-mail:nagasaki@kunitomi-div.com

URL :http://kunitomi-div.com/nagasaki

Marine Base Kunitomi



NEWS & NOTES

アジア水中考古学研究所の設立祝賀会開かれる。



2005年8月20日をもって福岡県より、正式に認可を受け発足いたしました。これを記念して平成17年12月20日、福岡ガーデンパレス(福岡市中央区天神)で、設立祝賀会が開催され、関係者が集まって、新たな門出を祝いました。冒頭、挨拶に立った来賓の九州大学名誉教授の西谷正氏(前日本考古学協会会長)は、「韓国との学術シンポジウムを開催されると聞いているが、今年は新安沖沈没船の発見から30周年にあたり、韓国でも様々な催しが企画されていると聞く、新しく設立されたアジア水中考古学研究所も、多くのアジア諸国と協力して活躍してほしい」とのお言葉を頂きました。

また、公務のため出席できなかった元佐賀県教育委員会の教育次長で、現佐賀女子短期大学長の高島忠平



祝辞を述べられる西谷正氏(前日本考古学協会会長)

氏からも「海が、東アジア各地を結ぶ歴史的回廊としての性格を解明する、壮大な視野を提供できるものと確信します。アジア水中考古学研究所の新たな発足を心からお祝いいたします」と力強い応援メッセージが届けられました。

ここで九州・沖縄水中考古学協会を前身とする、当研究所のこれまでの経過についてお話すると、1986年12月7日に九州・沖縄水中考古学協会が設立され、1989年から長崎県北松浦郡鷹島町において、海底調査に参加し、1992年11月には第1回シンポジウムを壱岐で実施いたしました。また、1994年には文化庁の国庫補助事業として、玄界島周辺海域の調査を行っています。(文責 石原 渉)

新安沈没船発掘30周年記念国際シンポジウム開催される。

2006年11月17日から19日にかけての3日間、韓国の木浦の国立海洋遺物展示館を主会場に国際シンポジウム「新安海底遺跡と14世紀のアジア海上交易」が開催されました。シンポジストの一人である林田憲三理事長をはじめ、当研究所の会員も参加しました。

新安沖沈没船の発見は韓国の水中考古学の出発点とも言えますが、韓国だけでなく、東アジアの水中考古学にとっても画期的な発見でした。新安沖で発見されたこの沈没船を示すだけで水中考古学の存在意義を語るのに多くの言葉を要しません。タイムカプセルと形容するにふさわしい遺跡です。

会場には韓国の他、日本、中国、台湾などの東アジア



国立海洋遺物展示館 記念シンポジウムの会場となった国立海洋遺物展示館

アの国々や地域の研究者をはじめ、フィリピン、インドネシアなど東南アジアの研究者、スリランカなど南アジアの研究者、フランスなど欧米の研究者の姿も見られました。韓国語、日本語、中国語、英語の4カ国語の同時通訳もレシーバーのチャンネルで聞き分けられ、情報と雰囲気共有することができました。

シンポジウムでは5つのセッションが設けられました。「新安船海底調査の意義」、「アジアの海のシルクロードの歴史と文化」、「アジアの海上交易とその品々」、「新安海底遺跡出土陶磁器の生産と流通」、そして、「アジアの水中考古学の現況と展望」です。

いずれも興味深いセッションでしたが、ここでは当研究所の林田理事長も発表を行った最後のセッションの内容について簡単に紹介します。

まず韓国の水中考古学については、国立海洋遺物展示館の金聖範館長が新安海底遺跡発掘調査以降の韓国水中考古学の歩みについて発表しました。これまで新安船を含めて12の水中発掘が行われ、その内、6つの海底遺跡の船体が引き揚げられています。新安船が注目されることが多いのですが、それ以外にも貴重な海底遺跡の調査が行われています。豊富な内容の発表でしたが、国際協力的な研究会としての「新安学」の提唱が印象深いものでした。特に発表資料集にはその箇所のみ強調文字で下線まで引いてあり、意気込みを感じました。

中国の水中考古学については、中国国家博物館水中考古研究センターの張威主任が「中国水中考古学の基本原則と方法の適用」と題して発表しました。南海1号沈船、福建定海白礁沈船遺跡、遼寧綏中沈船遺跡、



シンポジウム討論会風景

西沙群島海底遺跡、福建平潭大練島1号沈船など豊富な調査成果を披露しながらの発表でした。中国についてはもう一人、山東省蓬萊市蓬萊管理所の袁曉春文物科長によって、「中国蓬萊水城古船舶の発掘と成果」と題した報告が行われました。蓬萊は2002年に当研究所の研修旅行で訪れた場所です。近年、発掘された明代軍船や高麗古船の調査成果が発表されました。

続いて日本の水中考古学については当研究所の林田理事長が「日本の水中考古学の現況と展望」と題して発表を行いました。鷹島海底遺跡の調査成果を紹介しながら、現状の問題点を述べました。

フランスの文化省水中考古学研究所から Jean-Luc Massy 所長と Michel L'Hour 学芸部長が参加し、それぞれ「ヨーロッパの水中考古学の現況と展望」、「ブルネイ沈没船発掘-15世紀末ボルネオ海岸沿のアジア海上交易」と題した発表が行われました。ROV（水中ロボットカメラ）や潜水艇など最新の科学技術を投



特別企画展「新安船と東アジアの陶磁貿易」
(2006年9月22日～12月10日)



国立海洋遺物展示館館内
韓国の水中考古学の画期となった新安船



発表者・コメンテーター揃っての記念撮影



調査船 SEAMUSE 新安沖のデモンストレーション

入した調査が紹介されました。

発表後の討論会は時間の制約もあり、質疑応答に終了した感がありました。テーマが多岐にわたっているため、司会役も大変であったと思いますが、改めて沈没船の研究成果の幅広さを感じました。

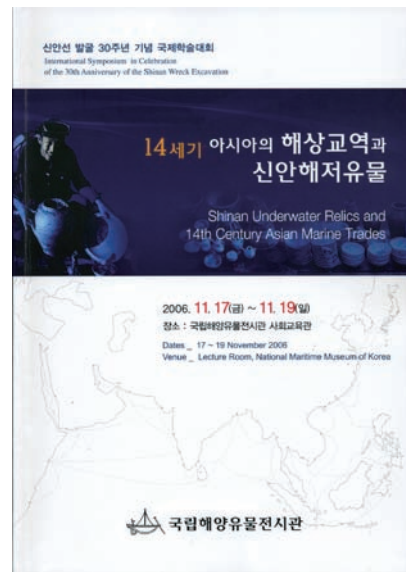
大会3日目は新安沖沈没船が発見された海域への見学ツアーが催され、進水したばかりの調査船「SEAMUSE」号による調査デモンストレーションも行われました。調査船の船腹には「National Maritime History Museum of KOREA」と記されていました。現在の英訳名は「National Maritime Museum of Korea」であり、2007年に「展示館」から「博物館」へと昇格するらしいので、新しい英訳名なのかもしれません。

また、今回のシンポジウムに合わせて特別企画展「新安船と東アジアの陶磁貿易」（2006年9月22日～12月10日）も開催されていました。シンポジウムの発表資料集の他、展示図録も立派なものが刊行されています。

アジアはもちろん世界にも広く韓国の水中考古学をアピールしたシンポジウムであったと言えます。韓国と同様に水中考古学に力を入れている中国も大いに刺激を受けたことでしょう。

私が前回、木浦の国立海洋遺物展示館を訪れたのは2000年のことですが、それ以降だけでも5つの沈没船を国立海洋遺物展示館が中心となって調査を行っています。

30年前の1976年に新安沖沈没船の発掘調査は開始されました。そして、当時は日本でも水中考古学の一つの画期を迎えていました。北海道の江差沖で沈ん



記念シンポジウム発表資料集
(A4判 570 ページ)

だ開陽丸の発掘調査です。ともに画期となる沈没船から30年経った今、大きな差を思い知らされます。今年が新安沖沈没船発掘30周年と知るまで、開陽丸発掘調査開始からすでに30周年を過ぎていることに気づきもしませんでした。開陽丸の発掘調査の意義を小さくしてしまった責任を感じますが、それが我が国の水中考古学の現状でもあります。韓国はもちろん中国もまた国家支援の元、飛躍的な発展を遂げています。台湾もまた大型国家プロジェクトが動き出しそうな気配です。同じ東アジアの中でも日本は個人の時間とエネルギーによって水中考古学が支えられています。しかし、むしろそうした現状であればこそ、当研究所の存在意義もまたあるのだと思います。

(文責 野上建紀)

活動報告 (2005 年 8 月～2007 年 3 月)

当団体は NPO 法人化に伴い、九州・沖縄水中考古学協会からアジア水中考古学研究所と名称を変更しました。設立した 2005 年 8 月から 2006 年度までの活動内容を簡単に振り返ります。

2005 年 8 月 12 日

NPO 法人化 (アジア水中考古学研究所へ改称)

2005 年 8 月 21 日～28 日

小値賀島海底遺跡調査 (長崎県小値賀町)

2005 年 10 月 31 日～11 月 5 日

鷹島海底遺跡調査 (長崎県鷹島町)

2005 年 12 月 18 日

「水中考古学研究」創刊

2005 年 12 月 18 日

アジア水中考古学研究所設立祝賀会 (福岡市)

2006 年 6 月 3 日～7 日

研修旅行 (中国江南考古学の旅)

2006 年 8 月 17 日～26 日

小値賀島海底遺跡調査 (長崎県小値賀町)

2006 年 11 月 17 日～19 日

新安船発掘 30 周年記念国際シンポジウム (韓国)

2006 年 12 月 22 日

「水中考古学研究」2号発行

2007 年 3 月 18 日～22 日

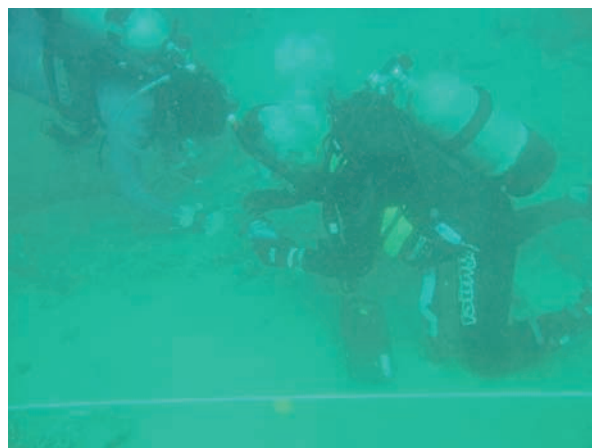
芦屋沖・志賀島沖海底探査

以上が NPO 法人化から 2007 年 3 月に至るまでの主な活動内容です。研究所設立祝賀会と新安船発掘 30 周年記念国際シンポジウム参加については既に述べましたので、小値賀島海底遺跡の調査と研究誌の創刊、芦屋沖・志賀島沖海底探査について簡単にご紹介します。

(1) 2005 年度・2006 年度小値賀島海底遺跡調査

当研究所の塚原博理事が所属する小値賀町教育委員会が調査主体となり、小値賀島の前方湾を中心とした海域の調査が行われました。

2005 年度の調査の際には WOORI 文化財研究院の研究者も参加して行われました。中国陶磁器や碇石など多くの遺物が発見されています。調査成果の詳細に



2005 年度小値賀島海底調査風景



研究誌『水中考古学研究』2005 年 12 月、2006 年 12 月にそれぞれ刊行された「水中考古学研究」創刊号 (左) と第 2 号 (右)

については小値賀町教育委員会発行の調査報告書に譲りますが、小川光彦会員と塚原博理事の共著による概要報告が金沢大学考古学研究室の『金大考古』52 号に掲載されています。アドレスは以下の通りです。

<http://web.kanazawa-u.ac.jp/~arch/cgi-bin/wiki.cgi>

(2) 「水中考古学研究」の創刊

2005 年に研究誌「水中考古学研究」を創刊し、翌 2006 年に 2 号を刊行しました。水中考古学、船舶史、港湾史、水上交通・交易史に関する論考や報告を掲載しています。

これらは 1 冊 1500 円 (送料別 290 円) で頒布しています。ご希望の方は ARIUA 事務局まで E-Mail にて注文できます。

また、九州国立博物館や福岡市博物館のミュージアムショップ、福岡市埋蔵文化財センター、六一書房 (東京) でもお求めになれます。

(3) 芦屋沖・志賀島沖海底探査

東京海洋大学（岩淵研究室）と共同で北部九州海域（福岡県芦屋沖・志賀島沖）のサイドスキャンソナーによる海底探査を実施しました。

東京海洋大学からは岩淵聡文教授、近藤逸人助教授が参加され、当研究所からは林田理事長、横田浩、塩屋勝利、折尾学、真部広紀、柏木数馬、川見早希子と野上が参加しました。

芦屋沖は付近の海岸で大量の陶磁器が漂着している海域であり、2004年に潜水調査を行った際にも海底で陶磁器が発見されています。今回、この海域で初めての海底探査を実施することができ、今後の調査のための基礎データを得ることができました。

志賀島沖は当研究所の前身である九州・沖縄水中考古学研究所によって長年、中世沈没船を求めて海底探査を実施してきた海域です。今回、沈没船らしき有望な映像が得られました。今後、ROV（水中ロボット）などで確認調査を行う予定です。

(文責 野上建紀)



芦屋沖海底探査で使用した蛭子丸（中西栄司船長）

(左下より続く)

(正味財産増減の部)			
V 正味財産増加の部			
1 資産増加額			
研究誌在庫(18年度発刊第2号)			
2 負債減少額			
増加額合計		1,272,000	1,272,000
VI 正味財産減少の部			
1 資産減少額			
当期収支差額(再掲)(マイナスの場合)	△ 2,336,711		
在庫減少額(Tシャツ、研究誌)	△ 115,600		
2 負債増加額			
減少額合計		△ 2,452,311	△ 2,452,311
当期正味財産増加額(減少額)			△ 1,180,311
前期繰越正味財産額			4,854,330
当期正味財産合計			3,674,019

平成18年度 特定非営利活動に係る事業
会計収支計算書

平成18年4月1日から平成19年3月31日まで

科 目	金 額 (単位:円)	
(資金収支の部)		
I 経常収入の部		
1 会費・入会金収入	295,201	
2 事業収入		
研究誌売り上げ	64,600	
3 市税還付、預金利息等	15,014	
経常収入合計		374,815
II 経常支出の部		
1 事業費		
芦屋沖及び志賀島沖海底探査事業費		
研究誌出版費		
諸手数料(貸金の銀行振込み及び手数料等)		
管理費		647,614
事務所維持費	1,062,612	
役員報酬	785,000	
経常支出合計		1,847,612
3 租税公課	267,300	
経常支出合計		2,762,526
経常収支差額		△ 2,387,711
III その他資金収入の部		
1 固定資産売却収入	0	
2 雑収入、その他の事業会計繰入金収入	51,000	
その他資金収入合計		51,000
IV その他資金支出の部		
1 固定資産取得支出	0	
その他資金支出合計		0
当期収支差額		△ 2,336,711
前期繰越収支差額		3,708,490
次期繰越収支差額		1,371,779

平成18年度 その他の事業
会計収支計算書

平成18年4月1日から平成19年3月31日まで

科 目	金 額 (単位:円)	
(資金収支の部)		
I 経常収入の部		
1 会費・入会金収入		
2 事業収入		
Tシャツ販売事業収入	51,000	
3		
経常収入合計		51,000
II 経常支出の部		
1 事業費		
Tシャツ製作事業費	0	
2 管理費	0	
3		
経常支出合計		0
経常収支差額		51,000
III その他資金収入の部		
1 固定資産売却収入	0	
2		
その他資金収入合計		0
IV その他資金支出の部		
1 固定資産取得支出	0	
2 特定非営利活動事業会計繰入金支出	51,000	
その他資金支出合計		51,000
当期収支差額		0
前期繰越収支差額		0
次期繰越収支差額		0

2005-2006 年度受領図書

青山学院大学 史学研究室

「青山史學」第23号 2005
「青山史學」第24号 2006

愛媛大学 埋蔵文化財調査室

「文京遺跡Ⅲ」一文京遺跡13次調査報告—
愛媛大学埋蔵文化財調査報告XⅡ 2004
「文京遺跡Ⅳ」一文京遺跡20次調査報告—
一文京遺跡23次調査報告—
愛媛大学埋蔵文化財調査報告XⅣ 2005
「愛媛大学埋蔵文化財調査室年報」
—2001・2002年度— 2004
「愛媛大学埋蔵文化財調査室年報」
—2003年度— 2005
「発掘愛媛大学」 2005

大谷大学 大谷学会

「大谷學報」
第八十三卷 第二号、平成十七年三月十八日
第八十三卷 第三・四号、平成十七年六月十日
第八十四卷 第一号、平成十七年九月二十日
第八十四卷 第二号、平成十七年十二月十日
第八十四卷 第三・四号、平成十八年一月二十日
第八十五卷 第一号、平成十八年二月二十日
第八十五卷 第二号、平成十八年三月十七日
第八十五卷 第三号、平成十八年七月十日
第八十五卷 第四号、平成十八年七月二十日

大谷大学図書館報「書香」第22号 2005年3月
大谷大学図書館報「書香」第23号 2006年3月

岡山理科大学 『岡山学』研究会

「旭川—流域を科学する Part 1—」
第6回『岡山学』シンポジウム 2004

鹿児島女子短期大学 南九州地域科学研究所

「研究所報」第21号 2005
「研究所報」第22号 2006

関東学院大学 人文科学研究所

「紀要」第103号 2004
「紀要」第104号 2005
「紀要」第105号 2005
「紀要」第106号 2005
「人文科学研究所報」第28号 2004
「人文科学研究所報」第29号 2005
「OLIVA」No.12 2005

元興寺文化財研究所

「元興寺文化財研究」No.87, 2005.10
「元興寺文化財研究」No.88, 2006.3

神戸大学 文学部 海港都市研究センター

「海港都市研究」創刊号 2006年3月

神戸女子大学史学会

「神女大史学」第22号 2005.11

志學館大学文学部

「研究紀要」第24巻 第3号

滋賀県立大学 人間文化学部

「人間文化」17号 2005.4
「人間文化」18号 2005.11
「人間文化」19号 2006.4

帝京大学文学部 史学科

「帝京史学」

第20号—史学科創立20周年記念号 2005

第21号 2006

帝塚山学院大学

『帝塚山学院大学研究論集[文学部]』第36集 平成13年
『帝塚山学院大学研究論集[文学部]』第39集 平成16年
『帝塚山学院大学研究論集[文学部]』第40集 平成17年

天理大学学術研究会「天理大学学報」

第56巻 第2号(第208輯) 2005年2月
第57巻 第1号(第210輯) 2005年10月
第57巻 第2号(第211輯) 2006年2月

徳島大学 埋蔵文化財調査室

「常三島遺跡2」—工学部実習地点・地域共同研究センター
棟地点—徳島大学埋蔵文化財調査報告書 第3巻 2006

徳島文理大学比較文化研究所

「比較文化研究所年報」第21号 2005年3月
「比較文化研究所年報」第22号 2006年3月

徳島文理大学文学部

「文学論叢」第22号 2005年3月
「文学論叢」第23号 2006年3月

佐世保工業高等専門学校

「沖新通信」Vol.63 2005年10月

長崎純心大学 博物館

「平和を〜永井隆」長崎純心大学博物館研究第13輯 2005
「長崎学の人々」長崎純心大学博物館研究第14輯 2005
「純心博物館だより」No.22、平成16年5月20日
「純心博物館だより」No.23、平成16年11月8日
「純心博物館だより」No.24、平成17年5月20日
「純心博物館だより」No.25、平成17年11月19日

長崎純心大学 長崎学研究所

「長崎学研究」7号、平成17年1月17日
「長崎学研究」8号、平成17年11月30日
「道原精萃図」第二冊 2004
「薬師寺文書嶋原實録並長崎表黒船一卷」2005

奈良大学文学部文化財学科

「文化財學報」第22集

南山大学人類学博物館

南山大学人類学博物館「年報」2003年度 2005
南山大学人類学博物館「年報」2004年度 2005
南山大学人類学博物館「年報」2005年度 2006
「南山大学人類学博物館紀要」第23号 2005
「南山大学人類学博物館紀要」第24号 2006

日本大学文理学部史学会

「史叢」第70号 平成16年3月
「史叢」第71・72号 平成17年3月
「史叢」第73号 平成17年9月

仏教大学文学部

「文学部論集」89号 2005年3月
「文学部論集」90号 2006年3月

宮崎女子短期大学

「紀要」第31号 2004
「紀要」第32号 2005

朝倉市教育委員会

「ぼく・私の秋月」平成16年
「あさくらのまつり」
「旧田代家住宅」甘木市文化財調査報告書第65集 2005
「平塚山の上遺跡Ⅱ」同第65集 2006
「櫛原下法寺遺跡・隈江楠木谷古墳」同第69集 2006

小郡市教育委員会

「寺福童遺跡3」小郡市文化財調査報告書第196集 2005

- 「薩摩街道筑後国境石」同第 197 集 2005
 「薩摩街道筑後国境石 2」同第 198 集 2005
 「力武町口遺跡」同第 199 集 2005
 「小坂井京塚遺跡 3」同第 201 集 2005
 「力武前畑遺跡 3」同第 202 集 2005
 「福童町遺跡」同第 203 集 2005
 「小郡正尻遺跡 4」同第 205 集 2005
 「寺福童遺跡 4 発掘調査概報」
 小郡市文化財調査報告書 第 206 集 2006
 「三沢北中尾遺跡 10 A 地点」—都市計画道路久留米線改良
 工事に伴う発掘調査報告書—同第 211 集 2006
 「平成 17 年度特別展 過去から未来への文化財」—小郡市
 埋蔵文化財調査の軌跡—
 「平成 17 年度企画展 黄泉への入り口」—有明海沿岸と豊
 前海沿岸の線刻壁画—
 「あるいてみよう ふるさと小郡の文化財」
- 鹿屋市教育委員会**
 「吉國遺跡」—県営シラス対策事業川西 2 期地区に伴う埋
 蔵文化財発掘調査報告書—鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告
 書 (75) 2005
 「樋ノ口 I 遺跡」—県営中山間地域整備事業に伴う埋蔵文化
 財発掘調査報告書—鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書 (76)
 2005
 「菖蒲遺跡」—経営体育成基盤整備事業 (旧：県営ほ場整備
 事業) 飯隈地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—鹿屋市
 埋蔵文化財発掘調査報告書 (77) 2005
 「石仏頭遺跡」—県営中山間上方隈黒畑線施設間連絡道路整
 備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—鹿屋市埋蔵文化
 財発掘調査報告書 (78) 2006
 「堀之牧遺跡」—県営中山間中野之段農道整備事業に伴う埋
 蔵文化財発掘調査報告書—鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告
 書 (79) 2006
 「小田遺跡」—県営中山間地域総合整備事業 KAM 大隈西部
 地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—鹿屋市埋蔵文化財
 発掘調査報告書 (80) 2006
- 熊本市立熊本博物館**
 「熊本博物館館報」No.17 2005
 「熊本博物館館報」No.18 2006
- 小林市教育委員会**
 「観請原遺跡」小林市文化財調査報告書第 19 集 2004.11
 「満永原遺跡」「谷ノ木原遺跡」「高津佐遺跡」同第 20 集
 2005.3
 「市内遺跡発掘調査報告書」小林市文化財調査報告書 第
 22 集 2006.3
- 鹿児島県肝属郡吾平町教育委員会**
 「原口岡遺跡」—下名東地区は場整備事業に伴う埋蔵文化財
 発掘調査報告書—吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書 (11)
 1995
 「中尾Ⅲ遺跡」—県道折生野神野線改良舗装工事に係る防火
 水槽移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—吾平町埋蔵文
 化財発掘調査報告書 (14) 1994
 「和田遺跡」—県道折生野神野線改良舗装工事に伴う埋蔵
 文化財発掘調査報告書—吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書
 (17) 2004
 「中尾遺跡Ⅳ」—一般地方道折生野・神野・吾平線改良事業
 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—吾平町埋蔵文化財発掘
 調査報告書 (19) 2005
- 佐賀県立九州陶磁文化館**
 「セラミックス九州」No.42 2006
- 中津市教育委員会**
 「定留遺跡田畑地区」中津市文化財調査報告書 35 集 2005
 「ボウガキ遺跡・福島遺跡棒垣地区、福島遺跡西入垣地区」
 中津市文化財調査報告書 36 集 2005
 「ボウガキ遺跡・福島遺跡棒垣地区、福島遺跡西入垣地区」
 中津市文化財調査報告書 36 集 2005
 「沖代地区条理跡 上安地区・竹ノ下地区、中津城本丸西南
 石垣 (Ⅳ) — 2004 年度 中津地区遺跡群発掘調査概報 17
 中津市文化財調査報告書 37 集 2005
- 日南市教育委員会**
 「平成 15 年度日南市内遺跡発掘調査概報」日南市埋蔵文化
 財調査報告書 第 19 集 2004 年 3 月
 「平成 16 年度日南市内遺跡発掘調査概報」日南市埋蔵文化
 財調査報告書 第 20 集 2005 年 3 月
- 福岡市教育委員会**
 「博多 8 7」—博多遺跡群 124 次発掘調査報告書—福岡市
 埋蔵文化財調査報告書 第 758 集 2004
 「博多 96」—博多遺跡群 132 次発掘調査報告書—福岡市埋
 蔵文化財調査報告書 第 805 集 2004
 「博多 97」—博多遺跡群 138 次調査報告—福岡市埋蔵文化
 財調査報告書 第 806 集 2004
 「博多 98」—博多遺跡群 139 次調査の概要—福岡市埋蔵文
 化財調査報告書 第 807 集 2004
 「博多 99」—博多遺跡群 140 次調査の概要—福岡市埋蔵文
 化財調査報告書 第 808 集 2004
 「博多 100」—博多遺跡群 141 次調査の概要—福岡市埋蔵
 文化財調査報告書 第 809 集 2004
- 豊前市教育委員会**
 「河原田塔田遺跡遺跡」(河原田遺跡群Ⅲ) 豊前市文化財報
 告書第 19 集 2004
 「鬼木四反遺跡」(遺構編) 鳥越今井野遺跡 豊前市文化財
 報告書 第 20 集 2005
 「ぶげんの民話」2004
 「ぶげん黎明」—考古学が語る歴史のロマン— 2005 秋の特
 別展 展示図録 2005
- 前原市教育委員会**
 「銭瓶塚古墳」—福岡県前原市大字曾根所在前方後円墳の発
 掘調査報告書—前原市文化財調査報告書 第 87 集 2005
 「フレ塚古墳」第 1 次発掘調査概要 前原市文化財調査報
 告書第 88 集 2005
 「潤地頭給遺跡」—福岡県前原市立東風小学校建設に係る発
 掘調査概要—前原市文化財調査報告書 第 89 集 2005
- 垂水市教育委員会**
 「柘原貝塚」垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書 (8) 2005
 「柘原貝塚Ⅱ」垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書 (9) 2006
- 行橋市教育委員会**
 「稲童古墳群」—福岡県行橋市稲童古墳群調査報告—行橋市
 文化財調査報告書 第 32 集 2005
- I COMOS**
 「News」Vol.15 No.1 2005
 「News」Vol.15 No.2 2005
 「News」Vol.16 No.1 2006

(2006.9.5 現在)



アジア水中考古学研究所

〒812-0041
福岡市博多区吉塚6丁目
10番12-308号

*Asian Research Institute of
Underwater Archaeology*

6-10-12-308
Yoshizuka, Hakata-ku,
Fukuoka City 812-0041 Japan
Tel.&Fax 092-611-4404
<http://www.h3.dion.ne.jp/~uwarchae>
kosuwa@h6.dion.ne.jp

編集後記

今回のニュースレターは、ほぼ石原副理事長が編集されていたが、印刷の関係で私が最終的な編集を行うことになった。そのため、本来なら私が編集後記を書く任にはないのであるが、刊行が遅れたお詫びとともに、私が書くことにした。ニュースレターが本来、持たなければならない速報性という面では問題があるが、記録性に意義を持たせて、あえて2006年当時の情報のまま掲載した。(N)



この冊子は競艇の交付金による日本財団の助成金を受けて発行しました。